

HEALING AND LOVING

チョウ イー・ティン(ミャンマー/ビルマ)と
クリシュナプリヤ・ターマクリシュナ(スリランカ)による新作品展
New works by Chaw Ei Thein (Myanmar/Burma) and
Krishnapriya Tharmakrishnar (Sri Lanka)

会期：2016年7月9日(土)-7月23日(土)
会場：山本現代(白金高輪)
主催：NPO法人アーツイニシアティヴトウキョウ [AIT/エイト]
共催：バックーズ・ファンデーション
協力：山本現代、LOKO GALLERY

本展に向けて制作が行われている彼女らのスタジオを訪れ、
出展作品とそのなりたちについて語ってもらった。

ロジャー・マクドナルド [AIT] (以下、R)：まずは自己紹介をお願いします。
クリシュナプリヤ・ターマクリシュナ(以下、K)：私は、スリランカの最北にある、ジャフナという町からやってきました。国外に出るのは今回が初めてです。東京は、ジャフナとは比べられないほどの大都市で、私は今までこれほど大勢の人たちを見たことがありません。その東京で、自分の作品を見てもらえることを嬉しく思います。ジャフナは、30年もの長い年月に渡って内戦を経験し、私はその最中に母親を失いました。母とともに過ごしたのは、私が生まれてから3日間という、あまりに短い時間でした。私の作品はそうした経験や記憶をもとに生まれたものです。

R：いつから作品を制作していますか？

K：小さい頃は、家の壁に絵を描いたり、小さな紙切れにドローイングをしては枕の下に隠したりしていました。絵を描くことは、そばにいない母を探すようなものでした。ジャフナ大学でアートを学び、内戦に阻まれながら6年をかけて卒業しました。その後、首都コロンボにあるサスキア・フェルナンド・ギャラリーで作品を展示し、私たちの社会が過去に何をおこなってきたのかを考える機会になりました。私にとってアートは互いの感情や経験の橋渡しをするものです。

R：あなたが考えるドローイングの重要性は何でしょうか？

K：私の祖父は宝石職人で、父は凸版印刷や絵柄を使って広告をデザインする仕事に就いていました。幼い頃から彼らの手仕事を間近に見られたことが刺激となり、私は色よりも絵柄を構成する点や線に興味を持つよ



チョウ イー・ティン



クリシュナプリヤ・ターマクリシュナ

うになりました。それらは今、私の表現に最も共鳴し、何よりも私の感情に非常に近い存在です。

R：チョウ、あなたの生い立ちについて教えてください。

チョウイー・ティン(以下、C)：1969年、私はビルマ(ミャンマー)のラングーン(ヤンゴン)で生まれ育ちました。当時、アートを学べる場所がなかったため、大学では法律を学びました。8年をかけて卒業しましたが、弁護士になることは私の目指すところではありませんでした。なぜならビルマでは独立した司法制度をもとにせず、裁判所は軍の指令に拠ってしまうことがあるからです。一方で、幸いなことに画家である私の父が、ずっとアートへの興味と情熱を持っていた私の良き指導者になってくれました。また、私は歌が好きで、人前で歌うことにも親しんできましたが、アーティスト達のパフォーマンスを観たことをきっかけに、のちに私も国際的なパフォーマンス・アート・フェスティバルに参加し、日本をはじめアジア各国を訪れるようになりました。

R：本展では、迷彩柄の生地をもとにペインティングやオブジェクトをいくつか展示していますが、そこにはどのような意味が込められていますか？

C：私は、7-8年前からこれらの作品を制作しています。もともと迷彩柄の洋服が好きでしたが、1988年8月8日、学生を主体として多くの人びとが参加した民主化運動を機に、迷彩柄が何を象徴するのか自分に問いかけるようになりました。この運動は、1962年から続いていた軍による独裁体制に対する反抗でした。2005年、私はヤンゴンの路上にある市場でストリートパフォーマンスを行いました。そこに反政府的な意見が取り入れられているとされ、警察



チョウ イー・ティン / 拾われた木を用いた作品



詩の朗読をする10歳頃のチョウ イー



制作風景

の取り調べを受けました。この一連の出来事を経験し、その後、アメリカに亡命しました。自分が何者なのかと考える時、こうして母国を離れたことに対して罪悪感を感じたり、自分は憶病者ではないかという複雑な思いが常に付きまといました。そして迷彩柄は、大変だった頃の経験を私の中によみがえらせるものでした。

そんなある日、サイゴン(ホーチミン)にある生地屋で、迷彩柄の灰色の生地を見つけました。その時、迷彩柄が持つ背景(=常に過去の経験や感情を思い起こさせるもの)を取り除いて私自身をも癒す他のものに変えてみようと思いました。すると、歌を歌ったりダンスに興じる男女の姿を柄の中に見いだすようになりました。その発見が私に喜びを与えてくれたのです。この作品は、私たちがこの世界でどのように生きるべきか、また、どう生きるにふさわしいのかを示しています。

東海林 慎太郎 [AIT] (以下、S)：これらの作品には、まるで自然そのものが現れているようですね。

C：茶色の部分は大地に、そして濃淡のある緑色の部分には、樹木や葉を見いだすことができます。

S：今回、あなたは娘さんとお母様と一緒に日本に滞在していますが、自身も



クリシュナプリヤ・ターマクリシュナ / 制作風景



父親の印刷機を使うクリシュナプリヤ



祖父から譲り受けた作品制作の道具

を持っています。私のパフォーマンスは、4-5年前まで、政治犯として投獄された人びとが刑期中に課せられる痛々しい拷問と、時に私たちの身代わりと捉えられるような彼らの犠牲的な姿がその題材となっていました。パフォーマンスを終えて周りを見渡すと、そこには困惑した観客の姿がありました。彼らは、すでにそれぞれの生活で山積みになった問題を抱えて生きているのです。それからというもの、痛みを語るより、前向きなメッセージを伝え、それを共有したいと思うようになりました。特に、私がどこからやってきて、どこに属しているかと思い悩んでいた頃は、創作に政治的な視点が多く含まれるほど、自分自身を不自由な窮地に追いやっていたのです。

これまで、私たちがどんなことを経験してきたとしても、それらを受け止めて自らを癒し、歩みを進めていかなくてはならないと私は感じています。

K：私のドローイングは、母への愛と思慕が生み出し、いつもその存在を肌で感じるためのものです。私たちが生きる今日の社会では、みなが争いや傷、苦痛に悩み…

C：トラウマもね。

母親になった経験は、その後の創作活動に何か変化を与えたのでしょうか？

C：これまで気付きませんでした。母親になってからは、意識することもなく、より敬意と希望をもって世界を捉えるようになりました。

S：クリシュナ、いくつかあなたのドローイングには、ランプが描かれていますね。

K：ランプは、たったひとつ残された、私と母を身体的につなぐものです。タミル・タイガーと呼ばれるタミル人の解放を目指す組織と政府軍の間で勃発した内戦では、ジャフナー帯の多くの人びとが惨い状況下に置かれました。1987年は内戦がさらに激化し、母は、まだお腹の中にいた私を守りながら、当時は電気も通っていない暗闇の中、ランプを抱えて逃げました。1993年、再び戦争が起こり、私の家族は町はずれに住まいを移すことを余儀なくされましたが、その時、私は同じランプを抱えていたのです。いつしかの母のように。ランプは、私の生まれた頃にまつわる記憶や、同じような経験を乗り越えた母と私を結びつけているものです。今でも、父がそのランプを大切に持っています。

R：展覧会のタイトル「Healing and Loving(ヒーリング・アンド・ラヴィング)」は、それぞれにとって何を意味していますか？

C：このタイトルは、ここ近年の私の創作活動に深く関わり、大きな意味合い

2016年6月15日 代官山にあるスタジオにて

編集 / 翻訳：東海林慎太郎、依田理花、川口茜
英文校正：ロジャー・マクドナルド
インタビュー写真撮影：依田理花
デザイン：植木俊裕(TREE&TRUNK)
タイトルロゴデザイン：福岡泰隆
制作：NPO法人アーツイニシアティヴトウキョウ [AIT/エイト]